Fukuin Sanbika Journal

新しい歌を主に歌え。全地よ。主に歌え。

November
2004.11

福音讃美歌ジャーナル

創刊準備1号

No.01

■巻頭言■

福音讃美歌協会準備委員会
委員長・安藤能成
世田谷中央教会牧師

聖書の宗教における礼拝を中心としたつどいと信仰そのものは、楽曲を伴う讃美を離れては考えられないでしょう。讃美の歌は、主なる神の聖名をたたえる表現であり、神のことばの宣言であり、信仰の表明であり、祈りであり、証しです。信仰者たちは讃美の歌という手段をもってこれらのことを表してきました。讃美の歌が持つこれらの本質は変わらないでしょう。けれども表現手段としての歌詞や楽曲は文化や時代、表現する人によって変化することは起こります。とくに広く用いられる讃美歌集ならば、表現する側だけでなく受け取る人々のことも考慮されなければなりませんから、絶えず検討がくわえられる必要が生まれます。今までにも種々の讃美歌集が発行され用いられてきました。それらは大切な宗教的芸術的文化遺産です。しかしそれらがどんなに優れて完成度の高いものであっても、讃美歌集の研究と編纂の作業はこの世が存続するかぎり完結することはないでしょう。

このたびの私たちの取り組みも、全能の主から示された一つの作業であると、みずから慎みつつ受け取らせていただくのです。ぜひ祈りつつご理解をお示しいただき、ご支援とご協力をお願いしたいと思います。それにしても主は讃美の歌という素晴らしい媒体を与えてくださったものです。一つの旋律が思いに浮かぶと歌詞が思い出されてきます。音によることばの記憶です。私が存じていた一人の方は、絶望に陥って自殺しようと夜のホテルの一室にこもっていたとき、近くから幼い日に耳にしていた讃美歌が聞こえて信仰が呼び覚まされ、思い止まって再び教会に帰ることができたのです。これから進められようとしている作業が主の聖名のためであるとともに福音宣教と救霊の働きのためであることを覚えるとき、喜びが湧いてこないでしようか。私は素人でただ会のまとめ役にすぎませんが、実際の作業に当たる方々は聖書的福音信仰に立つ新進気鋭の専門家です。今までの協会立ち上げの準備作業で私は楽しさを味わっています。楽しさと喜びを経験できる仕事場では、きっと良い実が結ばれることと信じております。主の栄光が現わされますように。

福音讃美歌協会準備委員会　経過報告

福音讃美歌協会準備委員会
副委員長　植木紀夫
キリスト教朝顔教会音楽主事

「福音讃美歌協会準備委員会」の役割と今までの経緯について、報告させていただきます。「福音讃美歌協会準備委員会」は、「福音讃美歌協会」の設立準備を行う委員会です。「福音讃美歌協会」は、広く福音派の諸教派・諸教団の協力機関として、恒久的に讃美歌および讃美歌集について考えることと、ふさわしい時期に福音派としての新しい讃美歌集の編集を行うことを目的とします。

◆2003年11月　「新しい讃美歌集についての懇談会」

いのちのことば社の招きにより「新しい讃美歌集についての懇談会」が持たれ、日本同盟基督教団（以下、同盟基督）および日本福音キリスト教会連合（以下、ＪＥＣＡ）の代表が共に集い、福音派としての今後の讃美歌集のあり方について懇談がなされる。

同２教派ではこれ以前からそれぞれ、讃美歌の課題を受けとめ、取り組もうとしてきた。また、同２教派所属の教会音楽家２名は2003年2月より、いのちのことば社の招きで意見交換をしてきた。

この懇談会で、以下の４点が確認され、２教派はこれらのことをそれぞれ教派に持ち帰った。

１．讃美歌と讃美歌集の課題に恒久的に取り組む第三者組織としての「福音讃美歌協会」設立の必要。
２．同協会からの讃美歌集出版を視野に入れること。
３．同協会設立の準備にあたる「福音讃美歌協会準備委員会」発足の必要。
４．同協会を2005年に発足することを目標とすること。

◆2003年12月～2004年6月　「福音讃美歌協会準備会」

先の懇談会の後、いのちのことば社、同盟基督、ＪＥＣＡは、「福音讃美歌協会準備委員会」（以下、「準備委員会」）発足に向けて「準備会」として話合いを継続。

ここで、いのちのことば社は、「福音讃美歌協会」設立を教会主導で進めることに同意してくださり、後に発足する「準備委員会」の段階ではオブザーバーに回ってくださることになった。

◆2004年7月～　「福音讃美歌協会準備委員会」

同盟基督およびＪＥＣＡは、「準備委員会」に委員を派遣することをそれぞれ決定し、「福音讃美歌協会」設立に向けての教会レベルでの準備が始まった。

日本自由福音教会連盟（日本福音自由教会協議会、日本聖契キリスト教団、日本聖約キリスト教団、同盟福音基督教会）がオブザーバーとして参加してくださることになった。

■■上記のような経緯を経て発足した「福音讃美歌協会準備委員会」は、現在「福音讃美歌協会」を2005年に発足させることを目標に、以下の事柄に取り組んでいます。■■

ア．規約作成を含む協会組織の立ち上げ
イ．協会の働きにおける理念の確立
ウ．讃美歌集編纂に至るまでのプロセスの検討
エ．讃美歌と讃美歌集に関する情報提供
オ．財政的裏づけに関して教派的理解協力を得る努力
カ．讃美歌集の編集実務の研究

以上

◇第一回◇福音主義教会音楽カンファレンス◇

これからの会衆讃美を考える

会場：日本同盟基督教団　世田谷中央教会
日時：2004年11月20日（土）午後1～4時

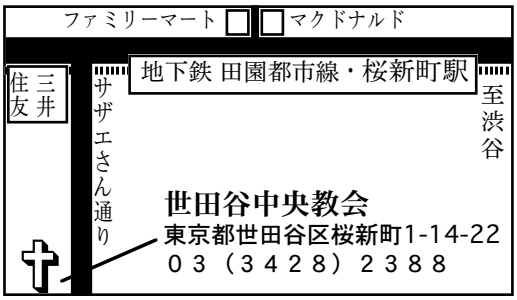
❑讃美礼拝・・・・・・・・・・・・・・・・説教　安藤能成

❑会衆讃美の現状と未来を考える（発題／ディスカッション／質疑）

司　会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・井上　義
発　題　歌詞の観点から・・・・・・・・・・中山信児
　　音楽の観点から・・・・・・・・・・植木紀夫
　　礼拝神学の観点から・・・・・・・・白石剛史

❑閉会（讃美／祈り／報告／挨拶）

会場地図



◆主　催◆
福音讃美歌協会準備委員会

◆後　援◆
日本同盟基督教団　礼拝と教会音楽委員会
日本福音キリスト教会連合　全国運営委員会
いのちのことば社

福音讃美歌協会準備委員会

安藤能成　委員長（日本同盟基督教団）
世田谷中央教会牧師／日本同盟基督教団・礼拝と教会音楽委員会委員長

植木紀夫　副委員長（日本福音キリスト教会連合）
キリスト教朝顔教会音楽主事／日本福音キリスト教会連合・讃美歌担当

石川弘司（日本同盟基督教団）
中野教会牧師／日本同盟基督教団・理事

井上　義（日本同盟基督教団）
等々力教会牧師／日本同盟基督教団・礼拝と教会音楽委員会委員

中山信児（日本福音キリスト教会連合）
菅生キリスト教会牧師／日本福音キリスト教会連合・全国運営委員／讃美歌担当

飯田勝利（日本福音キリスト教会連合）
鹿島福音キリスト教会牧師

オブザーバー

後藤喜良（日本自由福音教会連盟）
日本自由福音教会連盟理事／同盟福音基督教会・可児キリスト教会牧師

梅田與四男（日本自由福音教会連盟）
日本自由福音教会連盟理事長／日本聖契キリスト教団・新秋津キリスト教会牧師

鴻海　誠（いのちのことば社）
長沢俊夫（いのちのことば社）

事務　高橋満基（日本福音キリスト教会連合）
立川駅前キリスト教会員

（2004年11月現在）

BOOK REVIEW ....*

『現代の賛美歌ルネサンス』

横坂康彦著　日本基督教団出版局

評者　飯田勝利
鹿島福音キリスト教会牧師

本書は、1960年代イギリスに始まり、アメリカの賛美歌創作や賛美歌集において花開き、その後世界的に大きな影響を与えている賛美歌創作運動「ヒム・エクスプロージョン」（直訳すれば「賛美歌爆発」）について、歴史的、賛美歌学的な観点から紹介したものである。著者の横坂康彦氏は、アメリカで教会音楽を研究し、アメリカ聖公会の賛美歌集の改訂作業にもスタッフの一人として関わった。文の端々に、この運動とその成果を日本に紹介したいという熱意が伝わってくる。

福音派では「ヒム・エクスプロージョン」という言葉は聞きなれない言葉であろう。しかし、著者によれば「ヒム・エクスプロージョンを抜きにして現代の賛美歌を考えることは既に困難になっている」（９頁）ほどの大きな流れであり、この運動の中で作られた賛美歌は『讃美歌21』にも取り入れられている。

本書は、この運動の起源と歴史、その影響と世界的な広がりについてよく整理されているので、この運動を理解したい人にとって良き助けとなるであろう。また、この運動の賛美歌作家フレッド・プラット・グリーン、フレッド・カーン、ブライアン・レンなどの作品が多く紹介され、歌詞を味わいながら、それぞれの特徴や作風を理解していけるように配慮されている。

本書を読み、現代の賛美歌創作や歌集について考えさせられることは少なくない。例えば、歌詞の分かりやすさ、詩としての言葉の追求、包括的表現、時代や環境に即した内容の歌詞であること、歌詞に対してふさわしいメロディラインを選ぶ感覚、創作賛美の伝統と芸術性、歌集編纂や改訂へのうながし、賛美歌の教派を越えた共有の問題などが挙げられる。

著者は「ヒム・エクスプロージョンとは無関係に創作活動を続けているグループは少なくない」（46頁）とも述べている。賛美のうねりは多岐に渡る。今後、ヒム・エクスプロージョン以外の創作賛美のうねりについて紹介されることが待たれる。

『*新しい歌を主に歌え*　●礼拝と会衆讃美と讃美歌集の現在を探る』

井上義、遠藤稔、中山信児、植木紀夫、山路謙、手代木俊一著
いのちのことば社

評者　武田順児
下馬福音教会牧師

第二バチカン公会議以降、カトリックは伝統への尊重と現代的視点との調和を基調として典礼の歴史的回顧と教会自体の歴史研究の議論を積み重ね、それに伴い典礼の精力的な刷新運動が起こった。それは歴史の見直しと刷新が密接であることを教えてくれる。

今、福音派の中に新しい讃美歌集作成の動きがある。「個人の救いの確信」と「伝道の方策」を重視してきた福音派にとって、礼拝や賛美に関する歴史研究は明らかに立ち遅れている。そのような文脈の中で本書は出版されたが、福音派の現状に対して意識を喚起しようとしている点で画期的な書物と言えよう。

「岐路に立つ教会の歌」では、ルターに始まるプロテスタント会衆賛美と礼拝の歴史的な流れを追いつつ歴史性と現代性、普遍性と地域性の諸問題が取り上げられ、現代に至る礼拝と賛美の形が文化とどういう関係にあるのかを考えさせる。しかし、さらに日本の文化と讃美歌の関係まで論じられれば、日本の教会にふさわしい賛美の形、「日本人性」が求める賛美の形を考える上で具体的な議論が可能になると思われる。

その関心に近いものとして「日本の讃美歌· 聖歌集」がある。現在も多くの福音派諸教会で使われている『讃美歌1954年版』に至る成立過程が明治時代から詳細に述べられ、「統合讃美歌」編集上の課題を教えてくれる。過去を振り返ることによって今日の状況が見えると述べている点、『讃美歌21』の「まえがき」から改訂の必要性と編集でめざしてきたものを引用している点は、新しい歌集作成上のよき示唆となる。

ほか、イギリス、ドイツ、アジアの讃美歌集の成立過程について述べられたものは実際の歌集作成の段階で参考になるだろう。しかし評者としては、その前段階とも言うべき「なぜ新しい讃美歌集を作成するのか、必要であるのか」という、いわば諸教会が新しい歌集の必要性を共通認識できるような議論をより多く欲している。今後に期待したい。

本書が用いられることにより、福音派諸教会が礼拝と賛美について歴史から学び、それに伴った刷新運動が健全に進められていくことを願う者である。

『礼拝と賛美』

パク・チョンガン著　山口孔丹子訳　小牧者出版

評者　遠藤稔
東栄キリスト教会牧師

本書は礼拝と賛美を聖書から学ぶためのテキストである。韓国の賛美奉仕者連合会代表である著者は、賛美の聖書的理解の必要性を強く感じ、この本を出版した。学びはひたすら聖書を読み調べるように促すもので、結果として、本書より聖書を読んでいる時間の方が長くなる。重要な語句に関しては原語から考察している。著者の願いは読者が聖書を通して神を知り、常に礼拝と賛美をささげることである。

「礼拝1」では、礼拝の重要性と神を知ることの関連性を述べている。この章の実習は神の偉大さを指定された聖書から調べることと、それを告白する生活をすることである。「礼拝2」では、旧約における礼拝の歴史とキリストによる礼拝の関係が簡潔に整理されている。その中で著者はみことばを信頼しみことばに従って礼拝することをくり返し強調する。「賛美」の章では、「賛美は確信に満ちた告白であり、宣言です」と述べる。賛美は神を知ることと切り離せないのである。「敬拝」の章で扱うのは神の王権と主権であり、その前にひざまずき、ひれ伏し、明け渡すことを学ぶ。中心は黙示録である。「喜び」の章では、私たちが無視しがちな感情について聖書から考察する。「仕える」では、旧約における祭司やレビ人と新約におけるクリスチャンとの関わりが整理され、私たちが主に仕え、隣人に仕える生活そのものが礼拝であることに気付かせる。

私たちは礼拝や賛美の歴史や文化を耳にすることは多いが、聖書的根拠を聞く機会は遥かに少ない。文化は変わるが聖書は変わらない。聖書に聞こうとする本書の学びが私は嬉しかった。示された聖書箇所の前に立つ時、圧倒的な神のご臨在の前に自分の功績やら能力やら、そんなものは吹き飛んでしまうのである。

ただ、幾つか不足と思われる点もあった。各章に推薦曲が書かれているが、曲名以外の情報がなく、調べることができなかった。また「礼拝３」「礼拝の結果」についての聖書的根拠が乏しいのが残念であった。また、「喜び」では異言も含めて「自由に」「積極的に」表現することを強調するがアモス5章やＩコリント14章で警告されている点には触れられていない。人為的に手拍子や踊りを強制する心配やリバイバルへの著者の期待が聖書の主張と並んで記述され過ぎの感もある。とは言え、礼拝と賛美に関してここまで聖書そのものを読ませようとする本は見たことがない。全てのクリスチャンにお勧めしたい本である。

「こんな讃美歌集があったら･･･」

同盟福音基督教会
可児キリスト教会牧師・後藤喜良

多種多様な讃美歌集があり、教会が讃美歌（集）を選んで用いる時代になりました。しかし、一冊だけで、教会が、礼拝だけでなく諸集会や諸行事等あらゆる機会に、また教会員達が、家庭や学校や職場等あらゆる場と人生のあらゆる時に、開いて歌うことができる、聖書的な新しい讃美歌集が必要であると、私は考えています。そこで、新しい讃美歌集について、欲張りな要望をさせていただきます。

第一に、聖書信仰に立つ讃美歌集を要望します。準拠する翻訳聖書の確定も重要です。教会における讃美の本来の姿はみことばを歌うことです。霊感を受けた神のみことばにある、讃美、感謝、告白、執り成し、願いを、私たちの祈りとして、主に献げたいと願います。また、教会は旧新約の主の物語を歌い、語らなければなりません。

第二に、福音主義に立つ健全な教理に適う讃美歌集が求められます。啓示、神、人間、救い、キリスト、聖霊、教会、終末等々、教理全体を教える讃美歌が必要です。さらに、健全な教理に沿った健全な倫理――個人と教会生活、家庭と社会と世界等、全分野における主の御心――が明示される讃美歌も不可欠です。

第三に、教会の2000年の歴史と現代の世界中の教会で、歌い継がれている曲が集められた讃美歌集を期待します。私たちは、すでに天にいる世々の聖徒達と今全世界で主と共に歩むクリスチャン達と共に、できれば各国の言葉ででも、主を讃美したいのです。

第四に、礼拝、伝道（宣教）、教育、交わり等の教会の使命を果たしていくための讃美歌集が必要です。男性も女性も、老人から子どもまで、健常者も障碍者も、さらに在日外国人等も理解し、心を一つにし、声を合わせて歌えなければなりません。全ての漢字にふりがなを付けたり、口語と文語両方の歌詞を載せること等は、不可能ではないでしょう。

こんな讃美歌集を手にして、主をほめたたえる日が早く来ることを熱望しています。

♥　♥　✱　❦　❦

「次世代への讃美歌のために」

日本福音キリスト教会連合
馬天キリスト教会員　福田桂子

福音讃美歌協会の設立準備が、神さまの導きの中で進められていることを感謝します。教会学校から育った私にとって、讃美は身近なものでした。しかし、自分が聖歌隊や奏楽の奉仕者になるとは思っていませんでした。今は、この奉仕は神さまの

召しがなくては統けることができないことを、つくづく感じています。

奏楽をはじめた頃は、練習時間の不足や礼拝での緊張感に押しつぶされそうでした。最近やっと、自分が神きまからいただいためぐみや喜びを、礼拝の奏楽を通して教会の兄姉と分かち合うことができる奉仕なんだ！と遅ればせながらも気づかされ、喜びを味わっています。

私たちの教会では、礼拝で主に『讃美歌』『聖歌』が用いられ、その他に『讃美歌21』や、時折、歌詞に沖縄の方言が使われている『琉球讃美歌』も取り入れています。礼拝や聖歌隊での讃美歌を選曲するときに、歌詞が難しく、意味が理解しづらいと感じることがあります。会衆にダイレクトに伝わるわかりやすい歌詞の讃美歌が求められています。

また、聖歌隊の讃美の視点が、いかに良い声を出すか、大曲をどう仕上げていくかなど技術面に偏ってしまった時期があり、リードする側の課題を知らされました。

今、みことばに教えられ、讃美されるべき方ををたたえ、歌詞を味わうことで、一人一人が目を神さまに向けて讃美するように、意識が変えられつつあります。主日礼拝で「神にほめうたを歌え」というメッセージの後に『讃美歌21』の174番「あがめよ、わが魂」を讃美したときに、歌詞がとてもわかりやすく、内容を深く味わって讃美することができました。

これから進められる福音讃美歌協会の働きが、多くの教会の祈りと支援により、次世代に引き渡せる福音讃美歌の誕生につながることを期待し、祈っていきたいと思います。

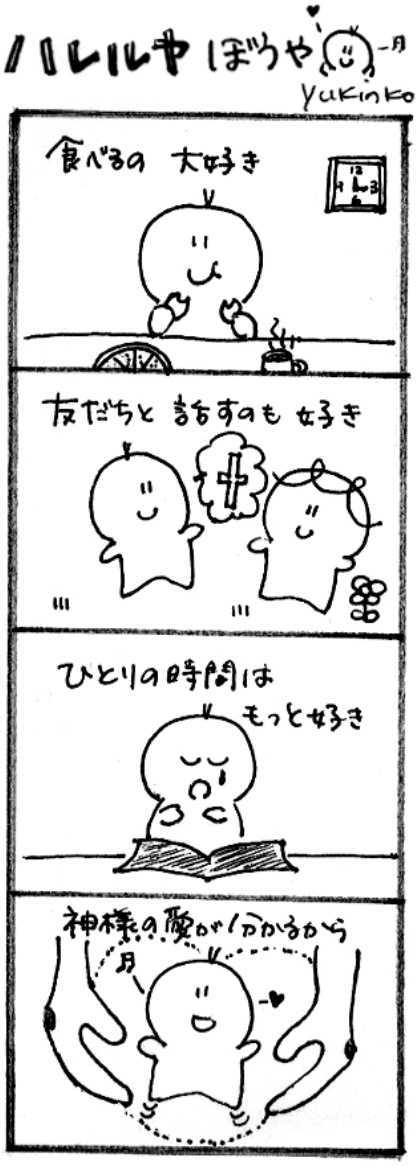
讃美歌コラム その一

井上義　等々力教会牧師

「讃美歌」とは一体何なのでしょうか。古くはアウグスティヌスが、讃美歌とは「神」への「賛美」の「歌」であると言いましたが、ここには神へと向けられている事、内容が賛美である事、そして歌われる事、という讃美歌の古典的な三要件が示されています。

けれども今日、教会で歌われる歌は実に多様です。それが「歌」である事には変わりは無いと思うのですが、しかし教会で歌われる歌のすべてが「神」に向かう「賛美」の内容であるとは限りません。例えば聖歌４２４番「ただ信ぜよ」の歌詞は、「十字架にかかりたる、救い主を見よや、之は汝が犯したる罪のため。ただ信ぜよ、ただ信ぜよ、信ずる者は誰も、皆救われん」となっています。これは明らかに「神」に向かう「賛美」の歌である以上に、「世」に向かう「説教」の歌であると言えるでしょう。また音楽のジャンルを問わずとも、証の歌、共同体の歌、というものも多数あります。

つまり、「賛美」は「教会の歌」の一部（けれども最も重要な一部）であると考えるべきでしょう。ドイツ語で言うところの「教会の歌」（Kirchenlieder）とは、「賛美」よりもより広い概念ですが、今日「讃美歌」という言葉が用いられる時、その意味内容はKirchenlieder的な意味での「教会（あるいは礼拝）で歌われる歌全般」と考えるのが良いでしょう。



祈りと献金のお願い

「兄弟たち。私たちのためにも祈ってください。」
Ｉテサロニケ5章25節

「福音讃美歌協会準備委員会」は、教会が主体になって、自分たちが歌う讃美歌と讃美歌集について共に考え、新しい讃美歌集を生み出していくための準備をしています。ぜひ、この働きを覚え、祈りとご支援をいただきますよう、お願いいたします。

◆◆祈りの課題◆◆

1. 諸教会の理解と協力をいただいて「福音讃美歌協会」を立ち上げることができるように。
2. 福音的な信仰に立ち、讃美歌の課題に重荷を持って関わってくださる方々（教派、教団、教会、牧師、信徒）が、さらに起こされるように。
3. 経済的な必要が満たされるように。
4. 準備委員のために。主に支えられて、委ねられた務めを全うすることができるように。

原稿募集：「VOICE　教会の声」欄は、皆様の自由な意見交換の場です。準備委員会や本誌へのご意見・ご希望、讃美歌への思い、教会での取り組み、等々、皆様からの投稿をお待ちしています。原稿は600字以内、氏名、教会名、連絡先を明記の上、下記『福音讃美歌ジャーナル』編集部まで、電子メールかファックス（手書不可）でお送りください。採用の場合には、ご連絡いたします。次号掲載の締切は、2005年２月末です。

編集後記 From Editor

『福音讃美歌ジャーナル』創刊準備1号はいかがでしたでしょうか。まずは「福音讃美歌協会準備委員会」の紹介のようなところから始めさせていただきましたが、「福音讃美歌協会」が設立されれば、読者の皆様と一緒に讃美歌と讃美歌集に関わるいろいろなテーマを深めていくことができるでしょう。

とはいえ、本誌が目指すのは、いわゆる専門誌ではなく、専門的な議論を誰でも読めるかたちで提供しつつ、多くの方々に関わっていただける親しみやすいジャーナルです。

「ハレルヤぼうや」は、そんなジャーナルの「顔」です。このかわいいぼうやが、これから讃美歌とどう関わっていってくれるのか、私もとても楽しみにしています。４コママンガを描いてくださったのは、世田谷中央教会の長澤由希子姉です。感謝！

それでは、次号をどうぞお楽しみに。　（な）

福音讃美歌協会準備委員会
〒154-0015 東京都世田谷区桜新町 1-14-22
世田谷中央教会内　TEL 03-3428-2388
Email: fsk@hymnos.org

郵便振替口座
番号　00190 - 5 - 171723
名称　福音讃美歌協会準備委員会
HP: http://www.hymnos.org/fsk

発行者・安藤能成　編集者・中山信児
◆『福音讃美歌ジャーナル』編集部◆　E.mail　fsk-journal@hymnos.org　FAX. 044-977-8053